

令和7年度全国学力・学習状況調査 結果の概要

女川町立女川中学校

1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準を維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 改善の取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 学校における生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

2 調査実施月日 令和7年4月16日(水)・17日(木)

3 対象学年 女川中学校第3学年生徒28名 当日実施生徒 26名

4 調査事項及び内容

- (1) 教科に関する調査：国語、数学、理科
- (2) 生活習慣や学習環境に関する質問紙調査

5 本校と県・全国との比較

| | 宮城県との比較 | 全国との比較 |
|-------|--------------|--------------|
| 本校の国語 | 下回っている(▼) | 下回っている(▼) |
| 本校の数学 | 大きく下回っている(▼) | 大きく下回っている(▼) |

6 学力調査結果から

(1) 国語の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・全国の平均正答率(以下全国の平均)及び宮城県の平均正答率(以下宮城県の平均)を下回る結果となったが、昨年度と比較すると縮まっている。
- ・[知識及び技能]の(1)「言葉の特徴や使い方に関する事項」において全国の平均を5.7ポイント上回り宮城県の平均を3.4ポイント上回る結果となった。日々の語句に関する学習が定着していると考えられる。
- ・[思考力、判断力、表現力等]における「A 話すこと・聞くこと」(問題番号2二)については、全国の平均を6.7ポイント、宮城県の平均を6.5ポイント上回る結果となった。また、「C 読むこと」(問題番号3二)においては、全国の平均、宮城県の平均に僅かに届かないものの、正答率88.5ポイントと高い結果となった。
- ・一部の記述式の問題を除き、無回答率が10ポイントを下回っている。意欲的に解答しようという姿勢が見られた。

(課題)

- ・[思考力、判断力、表現力等]における「B 書くこと」(問題番号4一)の無回答率が34.6ポイントであった。正答率が50ポイントであったことも含め、約半分の生徒が漢字を細部まで正しく覚えることができていないのではないかと考えられる。

- ・記述式の問題において正答率が低い傾向にある。特に、文章の効果を踏まえ、自分の考えとその理由を述べる問い（問題番号 3 四）は正答率が 15.4 ポイント、無解答率が 46.2 ポイントであることから、何を問われているのか、どのように答えればよいのかが分からず手が止まってしまったのではないかと考えられる。

②指導改善のポイント

- ・教材や発問に対して自分の考えを持つ習慣を付けさせる。その際に、根拠も共に考えるよう意識させる。自分の考えを持つことが苦手な生徒は、「はい」「いいえ」などの 2 択で答えられる発問から始め、意見を述べることに慣れさせる。
- ・漢字や語句に関しては、授業の導入や関連する単元を学習する際に正しく理解しているかを確認する。特に間違いやすい箇所に関しては、適宜説明をし、確認テストを通して知識の定着ができているかを確認する。

③質問紙から

○国語への興味・関心

- ・「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出た時に役立つ」という質問事項に対して肯定的な回答をした生徒が 9 割強だった。国語を勉強することの重要性を実感している生徒が多いことが分かった。
- ・「国語の勉強が好き」という質問事項に対して否定的な回答をした生徒が半数程度いるのに対し、「国語の勉強が得意」という質問に事項に対して否定的な回答をした生徒は 3 割弱であった。
- ・「国語の授業はよく分かる」という質問事項に対して肯定的な回答をした生徒は 9 割程度であり、全国及び宮城県の平均以上の結果となった。
- ・上記のように「授業はよく分かる」と回答しているにも関わらず、全国や宮城県の平均に及ばない正答率となった。授業中は学習内容を理解しているものの、知識の定着が不十分であると考えられる。生徒が学んだことを確実に身に付けられるよう、家庭学習の充実が必要不可欠である。従来のノートでの学習に加え、A I 型学習教材を活用して継続的に学習に取り組むことができるようにする。

○学習に向かう力の育成に向けて

- ・「どのような構成や展開の効果があるのか、根拠を明確にして考えているか」という質問事項に対して、7 割以上の生徒が「よくしている」あるいは「どちらかといえは、している」と回答した。また、「文章を書いた後に、読み手の立場に立って読み直し、文章を整えているか」という質問事項に対して、6 割以上の生徒が「よくしている」あるいは「どちらかといえは、している」と回答した。読み手に伝わりやすい文章を書こうと意識している生徒が多くいる反面、正答率は低い。生徒の意欲を維持しながら、多くの文章に触れる機会を作ったり文章を読み合い整えたりする活動を通して、読み手に伝わる文章はどのようなものか客観的に理解できるようにする必要がある。

（２）数学の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

（成果）

平均正答率において、正答数の中央値（メジアン）は、宮城県とは－１ポイント、全国とは－２ポイントであった。また、正答数分布グラフから、正答数が 7 問以下（全 15 問）におよそ 8 割の生徒が分布しており、本校の平均正答数、平均正答率の低さの要因になった。

- ・平均正答率において、宮城県や全国の四分位範囲と比較した際、第1四分位、第2四分位ともに宮城県とは－1ポイント、全国とは－2であった。第3四分位は、宮城県とは－3ポイント、全国とは－4ポイントであった。また、四分位範囲が5であり（宮城県や全国のそれは7）、正答数が少ない傾向にあった。
- ・学習指導要領の4領域（A．数と式、B．図形、C．関数、D．データの活用）の平均正答率状況において、全体的な傾向は、宮城県や全国のそれと同様の状況にあった。4領域の中では、「数と式」「関数」領域における正答率の割合が3割を下回った。
- ・外角の大きさ、ジャンケンで勝つ確率等、問題文が比較的簡潔で、資料や条件が分かりやすく示された問題の正答率は高かった。
- ・百分率を用いる問題や、数の性質の説明、図形の証明問題等において、正解率は低く、無回答率は高い傾向にある。そして、与えられた条件が多かったり、説明が長文になるなど煩雑さが増したりする問題において無回答率が更に高くなる。
- ・「関数」領域における問題では、 y の「増加量」に対して y の「値」を答えた生徒が42.3ポイント、また、「数と式」領域における問題では、素数を正しく答えられなかった生徒が26.9ポイントなど、知識を正しく理解していない、あるいは理解が不十分な生徒が多いことが分かった。
- ・「選択式」問題（全3題）や、答えを選択してその理由を説明する問題において、ほとんどの生徒が答えを選択して回答していた。正答を選択している生徒は、説明も正解しており、「思考・判断・表現」力がしっかりと身に付いていることが明らかになった。誤答を選択した生徒は、説明が無回答あるいは不正解である割合が高かった。
- ・「数学の勉強は得意」「数学の授業は好き」という質問事項に対して、肯定的な回答を選んだ生徒の割合は40ポイント程度であった。しかし、「数学の授業はよく分かる」という質問事項に対して肯定的な回答を選んだ生徒の割合は全体の70ポイントを超えた。
- ・「あきらめずにいろいろな方法を考えますか」という質問事項に対して肯定的な回答を選んだ生徒の割合は50ポイントを超えた。また「説明や問題を読んで、書かれていることを理解できるか」という質問事項に対しては、肯定的な回答を選んだ生徒の割合が64ポイントであった。

（課題）

- ・本調査における数学の学力は低い。
- ・数学が分かる・できる生徒、学習内容の理解が不十分な生徒と2分化している。
- ・数学で用いられる語句を正しく理解できていない。
- ・文章量、情報量が多い問題に対する誤答率や無回答率が高い。

②指導改善のポイント

- ・数学に関わる知識を正確に理解、定着させるため、授業において語句や公式等を確認する。さらに、必要に応じて板書する。
- ・数学における「説明する力」と「文章力」を伸ばす指導を継続させ、力の定着を図る。そのために、「(理由・根拠)なので(考え・性質)である。」といった簡易な記述から始め、学習内容に応じて適宜文章で説明する時間を授業内に設定し、実践する。
- ・文章が長かったり、情報量が多かったりする問題を意図的に提示し、問題解決に向けて必要な資料や情報を読み取る力を伸ばす指導を行う。

③質問紙から

数学に対して肯定的に回答している生徒は半数を超えなかったが、授業に対して肯定的に回答してい

る生徒の割合が高かったことから、以下の指導に重点を置き、改善しながら授業を行っていく。

○「基礎・基本的な知識・技能」

- ・授業の導入時においては、前時までの学習内容の振り返りを簡潔に行う。また、展開の終末時においては、授業のねらいの達成を生徒が実感できるよう確認問題に取り組ませる。
- ・授業の終結時には「授業の振り返り」を行い、何が「分かった」「できた」、また「分からないこと。できなかったこと」を記述させ、「生徒の学習」と「授業」のPDCAサイクルを確立する。
- ・教師が小学校学習指導要領を踏まえ、生徒には既習事項の復習や関連付けを行い、学び直しを推進する。
- ・ワークやA I 型学習教材（Qubena）等を活用し、生徒の実態に応じた問題に取り組ませ、生徒にたくさんの「分かった」「できた」を実感させ、自信を持たせる取組を継続する。

○「活用する力」

- ・計算法、図形等の性質、公式や定理を確認する際、その根拠や関連事項についても確認する。生徒が、計算法等を理解して覚えた後に、問題演習時間を多く設定したり、応用問題を与えたりする。
- ・学び合いの時間を設定し、自分の考えを伝えたり、友人の考えを取り入れたりさせる。

○学習に対する興味・関心等について

- ・ICTを活用し、問題の解釈を促すとともに、理解の深化を図る。
- ・数学で学んだ内容が生活で顕著に生かされている教材を授業に取り入れる。

（２）理科の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

（成果）

- ・理科の学習内容における平均正答数は、宮城県や全国の平均正答数とほぼ同様であった。
- ・「理科の実験では水道水ではなく、精製水を使うのか？」という疑問を解決するための課題を提記述する問題において、全国の平均を 22.2 ポイント上回った。（化学）
- ・地層の性質から水が染み出る場所を判断する問題では、全国の平均を 7.8 ポイント上回った。（地学）
- ・塩素の元素記号を問う問題において、全国の平均を 2.0 ポイント上回った。（化学）
- ・出題された問題に対し、無回答率は大変低く、探究から新たに生じた課題に着目した振り返りを記述する問題のみ無回答生徒がいた。
- ・出題されなかった問題について、予測正答率の過半数が、全国の平均・宮城県の平均とほぼほぼ差はなかった。

（課題）

- ・水中生物を観察する場面において、呼吸を行う生物について問う問題において、全国平均を 10.7 ポイント下回った。（生物）
- ・電気回路に関する実験結果を知識及び技能を活用し、予想できるかの記述の問題において、全国平均を 10.6 ポイント下回った。（物理）
- ・スケッチの仕方に関する知識及び技能が身に付いているかどうかを問う問題において、全国の平均を 21.0 ポイント下回った。（生物）
- ・植物のスケッチから、植物の茎や根の構造についての問題において、全国の平均を 9.0 ポイント

下回った。(生物)

② 指導改善のポイント

- ・理科における科学的な思考力・表現力を伸ばす指導の充実を図る。
- ・科学的な事象について、理由や根拠を持って、その説明ができるように実験の考察を行う時間や説明する時間を授業内に設定し、実践する。
- ・文章や図表を用いた問題を提示し、問われている内容や問題解決に向けて必要な情報を読み取る力を伸ばす指導を行う。

③ 質問紙から

- ・「理科の勉強は得意」と答えた生徒は約 70 ポイント、「授業の内容がよく分かる」に当てはまる生徒は 85 ポイント、「観察や実験をよく行っている」に当てはまる生徒は 75 ポイントを超えており、理科の学習に対して肯定的に捉え、取り組んでいる生徒が多い。
- ・「理科の授業で、学習したことが社会に出たときや将来役に立つか」という質問に対しては、約 65 ポイントが当てはまると回答しているが、「理科や科学技術に関係する職業に就きたい」と回答している生徒は 0 %であった。理科や科学技術に関係する職業がどのようなもので、仕事にどのように関わっているのかを知る必要があると感じる。
- ・学習した知識や考え方を普段の生活の中で活用できている生徒数や、理科の授業において問題を見出している生徒数は、過半数を下回る。学習内容を活用することや深く考えるための時間設定を行う。
- ・授業において、既習の学習内容を振り返る一問一答や小テストを行い、前時の学習内容を想起させることで、本時の学習につながるようにし、知識・技能の定着を図る。
- ・單元ごとに確認テストを行い、個々の生徒の理解度を確かめながら、必要に応じて不足している点を補ったり、問題に繰り返し取り組ませたりする。
- ・「振り返りを行っている」と回答している生徒は約 55 ポイントの生徒が回答した。学び合いの時間を設定し、自分の考えを伝えたり、友人の考えを取り入れたりさせる。

7 生徒質問紙調査結果から (○成果、▲課題)

(1) 生活習慣・学習習慣について

- 朝食を毎日食べて登校している生徒が、8 割以上いる。
- 毎日同じ時刻に寝ている生徒が 9 割以上いる。
- 毎日同じ時刻に起きている生徒が 8 割以上いる。

(2) 規範意識・自己有用感について

- 将来の夢や目標を 5 割の生徒が持っており、宮城県、全国平均を上回っている。
- 「人が困っているときは、進んで助けている」と答えた生徒が 10 割であった。
- 「自分と違う意見について考えることが楽しい」と思う生徒が 8 割を超えている。
- ▲いじめについて、大半の生徒は「いじめはどんな理由があってもいけないこと」と認識しているが、ごくわずか「当てはまらない」と回答した生徒がいた。
- ▲困りごとや不安を相談することを苦手としている生徒は、3～4 割程度いる。

(3) 学習に対する興味・関心等について

- 読書が好きな生徒が 3 割を超え、宮城県、全国平均と同等である。
- 学習した内容について、分かった点や分からなかった点を見直し、次の学習につなげることが

できている生徒が7割に近く、宮城県の平均、全国の平均と同等であった。

▲家庭で、平日1時間以上の学習時間を確保している生徒は4割程度、それに満たない、もしくは確保していない生徒が約6割いる。休日については、1時間以上が1割程度で、全くしない生徒が4割いる。

▲8割の生徒が、新聞をほとんど読まない、または全く読まないと回答している。

8 今後の取組

(1) 「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着を図る授業等の改善

①生徒が「何が分かったか」「何ができるようになったか」を実感できる学習指導の継続と工夫

- ・生徒の実態に加え、宮城県教育委員会の示す「子供の学びを支援する5つの提言～自立した学習者の育成を目指して～」を受け、協働的な学びを取り入れた授業展開が効果的と捉え、校内研究副題を「協働的な学習を取り入れた授業を通して」とした。授業において、協働的に学習する場を設定し、更に学習形態を工夫するなどの改善を行っている。学び合ったり、教え合ったりする機会は、習熟度が高い生徒にとって教えることが学習内容の理解をより深めることになる。また、習熟度が低い生徒にとっては、同級生から教えてもらえることが安心感につながっており、双方に良い効果がもたらされ则认为している。
- ・生徒の実態に応じて課題や学習形態を吟味する。学習内容や流れを明確にすることにより、学習に向かう姿勢と学習意欲の継続を図る。
- ・校内研究を見直して、生徒に身に付けさせたい「確かな学力」を明確にした。教師が互いに授業を見合うなど、学力向上に向けた指導力の向上を目指す。
- ・家庭学習と連動した授業づくりを模索していく。(例. 自己調整学習の実施)

②個に応じた学習支援の継続と工夫

- ・各教科で現在進めている小テストや単元の振り返りシートなどを活用し、生徒個々の習熟度を把握すると共に、生徒の実態に応じた学習課題の設定を一層工夫する。
- ・教科の特性により、習熟度に応じた少人数学習やT Tにより、学習支援を継続していく。
- ・A I型学習教材(Qubena)を活用し、過去の学習内容を確認したり、個に応じた振り返りや復習を行ったりする。(全員がキュビナに取り組むQタイム、朝キュビナの設定)

③I C T機器の効果的な活用

- ・生徒の苦手箇所をI C T機器で置換することによって、学習への取組を阻害しているものを取り除く。
- ・I C T機器の活用により、視覚的にアプローチすることで物事を捉えやすくしたり、アウトプットの手段とすることで、学習に向かわせる。

(2) 学びの土台となる望ましい生活習慣・学習習慣の形成

①基本的生活習慣の確立

- ・生徒会執行部を中心に進めている「スーパーうみねこルール」の改訂を通して、生活のリズムを整え、現実的かつ健康的な生活を送ろうとする意識を高める。
- ・自分の生活の振り返りから生活改善に結び付けながら生活習慣の確立を図る。

②自己有用感の涵養

- ・学級活動や学校行事で生徒の活躍の場を意図的に設ける。これらへの取組を通して、生徒の個

性や得意なことをお互いに認めたり、生徒が自分自身の活躍を振り返ったりすることで、「できた」「取り組んで良かった」と思うことができるようにする。

- ・生徒の希望や特性に応じて、就職と結び付けながら上級学校や学科、学習環境等を紹介する。
- また、自分にふさわしい進路選択ができるように進路学習を進める。

③家庭学習の定着

- ・各教科の学習内容や提出課題の内容を朝の会・帰りの会等でも確認する。
- ・学習を苦手とする生徒に対し、無理なく取り組める家庭学習の方法を提示し、継続的な学習習慣の構築・定着を図る。

(3) 女川小学校、女川向学館、地域との連携強化

①小学校との連携

- ・校内研究の主題や副題、目指す児童・生徒像を、小学校・中学校で共通のものとし、9年間を見通した指導を行う。また、定期的に小中教科部会を行い、学習状況やその他の情報交換を行うことで各教科の指導においても系統立てて9年間指導をする。
- ・小学校との連携の中で、基礎となる学習(読む、書く、聞く等)の定着と学習規律の確立を図る。
- ・中学校での学習にスムーズに取り組めるように、小学校への乗り入れ指導を行う。
- ・校内研究に基づいた提案授業を実施し、お互いに見合って検討する。

②女川向学館との連携

- ・放課後や夏休みの学習会における学習支援に協力してもらう。
- ・各種検定において、実施協力を得て、検定取得機会の確保と学習意欲の向上につなげる。

③地域人材の活用

- ・女川町教育委員会生涯学習係との連携を深め、「家読の日」の啓発を行い、「読解力」を身に付けさせる。
- ・総合的な学習の時間に取り組んでいる「潮活動」では、地域の人々を中心に講師として招き、各講座の学習を進める。